

# 概 述 分 節 統 語 法 ( 英 語 )

— 外国語教授法の一試論 — ( 2 )

1 9 8 5 年 9 月

片 柳 寛

## 第 2 部<sup>1)</sup>

### 第 1 章 教授法<sup>2)</sup>

1.0 第 1 部で設定した構造をもつ模式的な「英語」<sup>3)</sup>を教えあるいは学ぶ(以下「学習する」)<sup>4)</sup> ために教授者あるいは学習者が準拠すべき手続きを教授法という。

1.1 教授法はそのように了解された英語に必然的と思われる原則[注 1]に沿って立案される[注 2]。

[注 1] そのような構造を了解, 自得せしめるに最適であるべきこと。

[注 2] 必ずしも唯一とはしない。

1.2 教授法は教えるべき事柄——学習事項[注 1]とそれを教える順序[注 2]とを組み合わせ示す「学習過程」, 学習指導上必要な事項——「指導事項」(第 2 章, 文中では 指: と略す), および練習の量(時間に換算)[注 3]などを示し, 個別の学習者, その環境, 目的, 目標に応じて, 教授者あるいは学習者に準拠させる。また教材などの実例も付記できる。

[注 1] ここでは音形, 文化背景などは自明のこととして取り上げない。

[注 2] 第 1 部の記述の順序がそのままここでの順序とはならない。

[注 3] 到達位度と慣熟度の積を一定とすれば経験論的に算出できる。

---

1) *Abstract* を含み本誌前号 (1984) p27—54をうける。

2) 一般的にいう教育技術のことではない。

3) 序でも触れたように一応現行の中三, 高一レベルで習得すべき一般的, 基礎的英語に見合うものとする。

4) 序で述べたとおり学習とは「(1) 与えられた要素とその組み合わせ規則の, その都度の運用により, 意味とその表現を生成して行く過程, および (2) 与えられた表現を規則と要素とに開平し, 分岐経路を遡行して意味に到達する過程の両方向を具えた知的活動」を成就し, それを成就させることである。

2.0 学習過程の進行は展開的<sup>5)</sup>に行うことを原則とし[注1]，学習途次における現実英語との隔たりは逐次狭められるべきものとする<sup>6)</sup>。

[注1] 現実の英語人の自然習得の過程，同年令者の英語に直接的に類同一致している必要はないとする。

2.1 学習過程は統語部門，文法部門，語彙部門および意味部門の4層とし，統語部門を基幹[注1]として編成する。

[注1] 現実にはこれら4部門は相互的に関連しているが，ここでは原則として統語部門を固定し，他の部門を便宜的にその都度関連させる。

2.2 統語部門は前文表現，文表現，変形の3段階とし，文表現を中核[注1]とする。

[注1] 文表現の学習が必要かつ充分であり，前文表現は導入のため，変形は応用展開のためとする。

2.21 前文表現には胚表現と語句表現の2段階を立てる。以下このような表現が文の形で実現したものを胚文，語句文などと呼ぶ。

2.22 文表現には命令文，叙述文（もしくは平叙文），疑問文および感嘆—強意表現の4種を立て，叙述文を原型とする[注1]。また，これらには対応する反転表現[注2]を含み，それぞれ禁止，否定，反語などと呼ぶ。

[注1] 他の表現（反転表現を含む）は自明，可逆的にこれから派生できる。

[注2] いわゆる「否定」あるいは「打消し」を含む構造。

2.23 変形には各種の変形操作を含む。ただし一部は文法部門などと重複する[注1]。

[注1] 例えば，上記の反転の手続きは変形とも，文法手続きとも考えられる。

2.3 文法部門には単語について屈折と派生の2種をたてる。また2単語以上の組成について修飾（限定を含む），文修飾[注2]，包接[注1]，派生，呼応，助動詞構造および準動詞構

5) 序に言う「与えられた規則と要素との範囲内での活動は総て有効な表現とし，それ以外の表現と弁別，区別する。学習は新しい規則と要素の導入，付加によって展開し，学習者は自明かつ明示的な既習事項の範囲内での運用，慣熟が飽和すれば次の段階への進行を自動的かつ自発的に予期することになり，蓄積される学習は必要かつ充分で，内部的には常に有効である」ような進行をいう。

6) 学習者は与えられた素材と規則の組合わせに関しては「自由」であるが，すべての本来的な表現欲求について「自由」ではない。ただし現実英語の標本を無条件に強制されることはない。

造の7種をたてる。

[注1] 前置詞, 従属接続詞の前置接続が句, 節を構成すること。

[注2] 副詞による特定の語句の修飾に対し, 独立的な副詞による表現ないし文への意味添加をいい, そのような副詞要素を文副詞という。

2.4 語彙部門は縦断的にはいわゆる品詞別, 横断的には有限群と無限群に分極して網羅, 列挙して与える(第1部 7.1)。実際の語彙の配当は別途に(上記1.1)により定める。

2.5 意味部門はさらに表現[注1], 統語, 文法, 語彙の4層とし, 統語的意味とか文法意味などという。

[注1] 文形式を超越して伝達する意味内容があれば, それをいう。ただし変形表現——例えば慣用——と重複することもある。

図1

層	内 容								
	統 語	前 文 表 現		文 表 現 (反 転 表 現)				変 形	
杯表現		語句表現	命令文	叙述文	疑問文	感嘆—強意表現		各 種	
			(禁止)	否定	否定疑問	反語)			
文 法	1 単語	屈 折	派 生						
	2 単語以上	修飾 (限定)	文修飾	包接	派生	呼応	助動詞構造	準動詞構造	
語 彙	品詞別配列								
	有限群								
	無限群								
意 味	表現意味 統語意味 文法意味 語彙意味								

2.6 以上を図1で示す。(英文詳細を末尾に付した。)

2.7 これらの項目それぞれの下位の詳細は第1部の記述に準拠する。

2.8 学習過程の進行は不可欠, 単純, 簡単, 自明なものからとし, 各項目等深度に周延し, 次第に深度を増す<sup>7)</sup>こととする。一項目中の複数事項は直列的に導入するか並列的に行うかの

7) 「展開的に」という本論の原則により, 統語層の構成, 特に叙述表現を循環的に走査し, 順次下位を組み入れ精度を深め, 現実英語との近似度を高める。

いずれかとする[注1]。

[注1] 要素の付加に因る延長、展開であるのか、同列異種間のコントラストであるのかを明白にする。

**3.0** 最小限の要素で上記1章で示した学習過程の諸項目を覆うとし[注1]、また全くの初心者[注2]への導入として、導入の順序を定める。

[注1] 音形の導入は当然の事として触れない。

[注2] 学習者の年齢は問わないとするが、一応12才児を目安とする。

**3.1** 上記1章の2.1、および2.2により統語部門を基幹として進行する[注1]。

[注1] 統語層(以下、統層、同じく文層、語層、意層と略す。)各項目を遂次(図1の最上段を左から右に)導入して、成層的に進行する。

**3.2** 統層は等深度の単線走査[注1]を繰り返し、任意の深度、精度に到達することとする。一回の走査が完結、周延すれば一つの「深度」が達成されたという。

[注1] 1回に1項目ずつ導入し等深度に進行する。

**3.3** それぞれの統語項目にかかわる他の層の項目はその都度最小限に取り上げ、組み込む。

**3.4** それぞれの項目に適用する個別の類例の数は有限群と無限群に類別[注1]した上で適宜処方する<sup>8)</sup>。

[注1] 統語項目、文法項目は有限個しかないと考え、総数から逆算的に導入できる。語彙項目、意味項目は無限群であり、際限なく組み込むことができるが、最小限に止どめることもできる<sup>9)</sup>。

**3.5** 各項目の意味はその都度示す他に、予め辞書的に準備して置く[注1]こともできる。

[注1] 例えば単語の意味は辞書に、また文の意味は第一部で「文脈」として与えられている。

**3.6** 表現ないし文の最終的意味は部分的かつ段階的に与えられたこれら各層での意味の積算合計として到達せしめる。

---

8) 現実的な語彙の選択、語彙数の決定は指導上の問題として後に触れる。

9) 最小限の要素で最大限の慣熟度に到達するか、最大限の要素で最低限の慣熟度で完結したとするか——の両極端の間で個別的、現実的に選ぶこととなる。

3.7 一つの学習項目がどの程度に学習されれば完結し、次の項目ないし段階に移れるかの判断は経験的に個別に行う。ただし最小限度を何処に置くかは定めておくこととする[注1]。

[注1] 少くとも一項目には2個以上の類例を与え、常に選択、弁別を行わしめる。

3.8 一つの項目が導入されれば、それが循環的に[注1]適用されることを原則とする。従って運用範囲は逡増する[注2]。

[注1] 条件が合致する限り逡行的に適用、周延する。

[注2] 対応する用例の総てに当たる練習時間はないが、必ずしも必要ではない。

3.9 学習過程の項目は深度の進行とともに逡減するが、適用が循環的であるので[注1]、運用範囲は逆数的に拡大することになる。

[注1] 深度の浅い部分は運用のたびに繰り返されるので、次第に強化される<sup>10)</sup>。

## 第2章 学習過程

0.0 具体的な学習過程の進行の一例を以下に示す。深度-1に始まり深度-20で完結する。(以下0.5までは図1で示したものを再掲する。)

0.1 深度はそれぞれ 1:前文表現, 2:文表現, 3:変形 の3段に区分される。

0.2 前文表現は 1:胚表現と 2:語句表現に二分される。

0.3 文表現は 1:命令文, 2:叙述文, 3:疑問文, 4:感嘆—強意表現および, 5:反転表現の5つに区画される。

0.4 変形についてはその都度項目をあげる。

0.5 文表現の5区画はいずれも I:完全自動詞構造, III:完全他動詞構造, IV:与格(もしくは、授与)動詞構造, II:不完全自動詞構造, V:不完全他動詞構造, の順序で進行する。

---

10) いわゆる「基礎」は逡的に強化されるのではあるが、当初に確定して置かねば付加される項目の負荷に堪えられなくなる恐れがある。

0.6 何等かの理由で導入事項の無い箇所は空白とする。ただしその項目の既習事項に言及し循環的に、練習などを課す。

0.7 学習過程の作成上の考え方などは、脚注に記す。

0.8 以下、学習過程を深度-1から示す。

### 深度-1

1.0 前文表現[注1]から導入する。(以下「——から導入する」, 「——を導入する」などを適宜略す。) 指: 前文表現は深度-3以下で新たに持ち上げる項目は殆どない[注2]。

[注1] 分節以前の表現であり、単語、句、節、あるいは文の弁別に至っていない。文ではないが、表現としての意図、効力を具えると認める場合をいう。

[注2] 言語的には基礎的であるが素朴で、ここで言う統語法を基幹とした教授法では基準としない。

1.01 前文表現のうち、表現[注1]。いわゆる「喃語」、歎声、擬声語、最後に単語としての感嘆詞[注2]。

[注1] 統語、文法、語彙、の各層が未分で、分節的な説明困難。強いていえば意層としては表現レベル——分節不能の意味——のこととする。

[注2] 既存の単語として析出、意識されれば、あるいは単語であるとして与えれば、語層が分明になり、単語として自立し、いわゆる一語文、即ち語句表現に移行する。

1.02 語句表現[注1]。語層からいわゆる感嘆詞、名詞、形容詞、副詞、を並列、導入、最後に動詞、特に明確な完全自動詞[注2]の原型。 指: それぞれ、この段階では一単語であること、および、それぞれの品詞と意味の品詞別を意識、弁別せしめる。

[注1] 文表現の感嘆—強意表現と区別する。語句表現は統層では未分節ないしは一語一文節である。

[注2] 命令文への移行を準備。

1.1 文表現のうち、命令文<sup>1)</sup>。

1.11 完全自動詞命令。指: 現実に反応し、行動を起こせるような、また完全自動詞であることが明確な語から。

---

1) 主語を排除することで成立している命令文で、予めいわゆる5文型を導入する。

1.12 完全他動詞命令。目的語としての名詞の後置。名詞は固有名詞から。一般名詞は不特定、複数から[注1]。指：2単語2分節の配列による統語意味[注2]。

[注1] 屈折、限定、格変化(屈折)等の文層事項をこの深度では避ける。

[注2] 第一部で「文脈」として与えた。

1.121 与格動詞命令。8.1まで保留[注1]。

[注1] 直接目的語の副詞性を考慮し、前置詞句の導入を待つ。

1.122 一語副詞による動詞の修飾[注1]。自動詞の場合は直接後置、他動詞の場合は目的語の後[注2]。指：前置詞と同形でないもの——例えば *up*, *down*, *out* など——から。

[注1] 2個の要素——この場合いずれも単語——が結合して、1個の分節を構成する、すなわち文層の項目「修飾」である。

[注2] 修飾的添加は必ずしも隣接を必要としない。

1.13 不完全自動詞命令[注1]は3.0まで保留する。

[注1] 不完全自動詞による命令文はこの深度ではその用途に限界があることによる。

1.14 不完全他動詞命令。同じく3.0まで保留[注1]。

[注1] 上記同様、この深度ではやはり命令としての用途に限界がある。

## 1.2 叙述文

1.21 完全自動詞構造。命令文文頭への主語分節(主部)の循環的付加。動詞は命令に用いたもののうち、規則変化動詞の過去[注1]。彙層事項として、主語には目的語と同様、固有名詞、もしくは複数名詞を「不特定」で[注2]充てる。指：代名詞の導入を保留する。

[注1] 文層における動詞の屈折の導入である<sup>2)</sup>。

1.22 完全他動詞構造。文層事項として、固有名詞——特に人名——を等位接続詞 *and* で2個連結し名詞1個として扱い[注1]複数扱いとする。文中の主語および目的語に循環的に適用。

---

2) 叙述文の導入には、既成事実の報告としての「過去の事柄の記述」の方が、話者の超時間的な判断を示す現在時制表現より適切であるとする。

[注1] 修飾関係でも、助動詞と動詞原形との連結でもない——厳密には同格、並列などの変形手続きである。

1.221 与格動詞構造。保留。

1.23 不完全自動詞構造。保留。

1.24 不完全他動詞構造。保留。

1.3 疑問文。文層事項として、代動詞 *did* の命令文文頭への添加。過去形動詞の原形への復元。既習の動詞総てに適用[注1]。いずれも循環的に適用。指：疑問詞による疑問表現は代名詞の導入4.31を待つ。

[注1] 疑問文が過去時制において、既習の2文型に限り、一般的に可能となる。

1.4 感嘆—強意表現。上記1.3の疑問表現を転用できる。疑問詞による疑問文の強意表現は保留。

1.5 反転表現。2.51まで保留。

1.6 変形。上記のうち、変形操作と考えられる統語項目をまとめると次のとおり。

1. 胚文 1.01 変形手続きでは説明困難。
2. 語句表現 1.02 単語、句による文の代行。
3. 命令文 1.1 主語の排除。(省略としない。)
4. 一語副詞 1.16 目的語の後への分離、倒置。
5. 疑問文 1.3 代動詞 *did* の主語の前への倒置。
6. 感嘆—強意表現 1.4 疑問文からの転用。

## 深度—2

2.0 前文表現。予備的に、単語各品詞間の修飾関係[注1]を範列[注2]により循環的に適用し、語句表現に用いる。

[注1] いわゆる「一語文」を、いうならば「一句文」ないし「一分節文」に延長する。



[注2] ここでの範列は、例えば次の通り。

1. 形容詞は名詞のみを修飾する。
2. 副詞は名詞以外を修飾する。

2.1 命令文。代名詞、特に人代名詞の目的格を他動詞命令の目的語に(4.32)、範列により循環的に適用。指：名詞目的語との文層に於ける相異——例えば、その指示機能に由来する人称、数、性などによる屈折、あるいは形容詞による修飾の不成立、また限定詞を内臓する「特定」性—— *him = the man* ——など。

2.2 叙述文。主語に代名詞主格を範列により、以下循環的に適用。指：代名詞の範列における屈折の各種不整合性に留意。所有格は限定詞の導入(4.1)まで保留。

2.21 完全自動詞構造。独立した文副詞の循環的付加[注1]。指：個数、位置などの文体的自由。意味上名詞と同形のもの——例えば *today* など——は前置詞句の導入(8.1)まで保留。

[注1] 修飾関係、助動詞構造(9.2)まで保留。統層では主語、目的語、補語などと同列の分節ないし項目である。

2.22 完全他動詞構造。

2.221 与格動詞構造。10.1まで保留。

2.23 不完全自動詞構造、2.24 完全他動詞構造。それぞれこの順序で言及し、循環的に練習を課す。

2.3 疑問文。疑問代名詞の一部を範列により[注1]、主語および目的語に循環的に適用。指：主語以外の場合は倒置。

[注1] 一般に、疑問詞の品詞は対応する叙述文の相当する要素に拠る。

2.4 感嘆—強意表現。助動詞 *do* を自動詞命令、他動詞命令の文頭に強意的に添加。指：単なる付加ではない[注1]。助動詞、代動詞導入への準備。

[注1] 助動詞の原形動詞との結合は修飾関係ではない。

2.5 反転表現。禁止は命令文に *do* の *not* による反転[注1]を先行させる。

[注1] 禁止は一種の強意でもある。また *not* は一語副詞として助動詞を後置修飾している。

2.51 否定疑問。疑問文の反転として *did*, *do* に *not* を後置修飾、倒置の際も分離しない。これらの *not* との短縮形を認める[注1]。

[注1] 強いて行う必要は無いが、現実英語への近似のため認める。

2.6 変形。等位接続詞 *and*, *but*, *or* による連文形式[注1]。

[注1] 表現としては1個であるが、統語的には2個以上の独立した文の羅列である。

### 深度—3

3.0 前文表現。(以下この項目に言及し、用例を加えるのみ。)

3.1 命令文。不完全動詞構文を導入。補語[注1]としては形容詞補語から導入[注2]。

指：名詞分節である目的語との弁別のため。

[注1] 主語、目的語、などと並ぶ不可欠な統語的要素ないし分節である。名詞補語は8.32まで保留。

[注2] 当初(1.1)において完全動詞構造と並列し、対照的なものとして導入すべきであるが、ここまで保留する。

3.11 不完全自動詞命令。形容詞補語を彙層から適用。指：不完全自動詞による命令は自然な命令の用途に限界があるので、差し当たり *be* のみ導入。形容詞補語には単語形容詞のみでなく、形容詞句も適用。(以下、同じ。)

3.12 不完全他動詞命令。上記と同様に形容詞補語のみ導入。指：命令表現としての用途に限界があるので、差し当たり *make* のみ導入<sup>3)</sup>。

3.2 叙述文。

3.21 完全自動詞構造, 3.22 完全他動詞構造, 3.221 与格動詞構造。保留。

---

3) 不完全他動詞は補語への依存度が高く、目的語と補語との間に不完全自動詞構造が潜在している。彙層でも類例に限界があり、むしろ助動詞に近い——有限群的——とすべきところ。

- 3.23 不完全自動詞構造。 *be* の過去形屈折導入。
- 3.24 不完全他動詞構造。循環的に適用。
- 3.3 疑問文。循環的に適用。
- 3.31 不完全自動詞 *be*——過去形，二人称複数——に限り *did* を要せず，倒置による。疑問形容詞 *how*，もしくは疑問副詞としての *how* に修飾された形容詞句を文頭に出す。
- 3.32 不完全他動詞構造。代動詞としての *did* を文頭に出す。疑問詞を文頭に出し，*do* に導かれる部分を置く。疑問代名詞が主語，目的語に，疑問形容詞もしくは疑問形容詞句が補語に対応する。
- 3.4 感嘆—強意表現。指：疑問表現を反転したものが実際には自然である。
- 3.41 不完全自動詞構造の場合，疑問詞が文頭に出るのみで倒置はしない。
- 3.42 不完全他動詞構造の場合も，疑問詞があれば文頭に出すが，*do* は適用されず，倒置もしない。
- 3.43 動詞 *be* による構造は命令以外では *do* によって強調できない。
- 3.44 *be* 以外の動詞（自，他，および完，不完に拘わらず）*do* もしくは *did* によって導くことで強調できる。
- 3.5 反転表現。打消し，ないし否定の *not* の代動詞 *did* への後置修飾による。この反転は一種の強意を伴うともいえる。
- 3.51 代動詞 *do not* による反転は *be* には適用しない。ただし命令文の反転である「禁止」の場合は許される（上記，強意表現による）。
- 3.52 不完全他動詞構造の場合。*do* もしくは *did not* による反転を適用。

3.6 変形。深度-3における変形事項と考えられる項目は次のとおり。

1. 補語に対応する疑問形容詞 *how* (疑問詞句を構成する疑問副詞でもある) の導入。
2. 疑問文における動詞 *be* の倒置。
3. 疑問詞の感嘆詞への転用。

#### 深度-4

4.0 前文表現。

4.1 命令文。目的語名詞に特定標示を与える[注1]。固有名詞、代名詞(単数は未導入)はそのまま特定とする。限定詞各種[注2]の導入<sup>4)</sup>。限定詞による特定の標示は1名詞要素につき1回、修飾限定手続の最後に適用。指:この段階では普通名詞は複数形でしか導入されていない。定冠詞を強いて不定冠詞と取合さない<sup>5)</sup>。

[注1] 無標示の複数名詞との意層、文層での弁別、対比を明確にする。

[注2] 指示代名詞では複数屈折を持つ *these*, *those* がそれらの単数形の導入に先立つ。

[注3] 各種の限定詞、特に代名詞所有格などを範列により、また最後にそれらの一般形として定冠詞 *the* を導入。

4.2 叙述。4種——与格動詞構造は保留中——の文型が出揃ったので、以下並列的に進行する。改めて導入する項目の無い場合も番号だけ記入しておく。指:練習は循環的かつ周延するように行う。

4.21 完全自動詞構造。主語である複数名詞にも上記4.1を適用し特定する[注1]。指:以下各文型(動詞構造)に適用。

[注1] 以後、名詞要素については「特定-不特定」が、単数-複数にかかわらず不可避の二者択一となる。指:特定-不特定の対比を文層、意層での基本的事項として説明する。

4.22 完全他動詞構造。目的語に単数代名詞目的格を範列により導入[注1]。指:数、人称、性による屈折の不整合性。

---

4) ここでは敢えて、通常的な導入に反し、不特定複数および特定単数の方を、不特定単数(不定冠詞付き、数標示ゼロ——単数標示と同形——)より一般的として先に導入する。

5) 同様に、定冠詞と不定冠詞とが矛盾概念であるかのような導入を避けた。

[注1] 単数名詞の導入に先立って、単数代名詞、しかも目的格で導入する。指：有数名詞単数の意層における特異性に留意<sup>6)</sup>。

4.221 与格動詞構造。保留。

4.23 不完全自動詞構造。上記4.21と同様に適用し、特定された複数名詞主語の導入。

4.24 不完全他動詞構造。上記4.22を適用し、目的語に単数代名詞——必然的に「特定」——を導入。

4.3 疑問文。

4.31 主格疑問人代名詞を範列により、各文型の主語に。指：屈折。

4.33 不完全自動詞構造の主語に事物疑問代名詞主格を。指：数による屈折なし。

4.34 不完全他動詞構造。同様に事物疑問代名詞を目的語に導入。複数名詞目的格は人代名詞で統一して置く。指：格、数による屈折なし。

4.4 感嘆—強調表現。

4.5 反転表現。疑問詞による疑問表現に反転はあまり起こらない。*not* を含む短縮形を認める[注1]。

[注1] 強いて短縮する必要は無い<sup>7)</sup>。

4.6 変形。いわゆる「付加疑問」を導入[注1]。

[注1] 等位接続詞を介せず、肯定文に反転文を、否定文に肯定文を付加して、文意を確実にする為の表現で、一種の連文(2.6)であり、強調表現ともとれる。指：付加された文では名詞要素が代名詞化され、*be* 動詞、代動詞—助動詞、反転文の場合の *not* 以外は省略変形をうける。

6) 類概念の方が単独の単体の数認識に先立つという事実にも合致する。

7) この段階で現実英語に近似させるといっても、*not* が先行する動詞、代—助動詞などを緊密に修飾し—要素化している——疑問文、反転文など、また倒置の際など——ことを示すためであれば、有効とする。

深度—5

5.0 前文表現。語句表現として単数形名詞のうち不可算名詞——複数形を持たぬ名詞(無数名詞あるいは不可算名詞ともいう)——を導入[注1]<sup>8)</sup>。限定詞による「特定」の適用[注2]。指：語尾に複数表示の *s* を欠く。

[注1] 人名、地名などの固有名詞を呼格的に、また物質名詞など複数が意味的に馴染まぬ事物を一語文的に。

[注2] 意層での「特定—不特定」の対立、対比。

5.1 命令文。上記の呼格的な名詞を命令文の文頭に、副詞的に付加。命令の受け手としての固有名詞、もしくは代名詞 *you* の呼格ないし副詞分節としての文頭への付加。

5.2 叙述文。

5.21 完全自動詞構文。主語に無数名詞を導入。特定—不特定の選択。特定の場合[注1]に代名詞との置換。

[注1] 疑問文に対する応答文中における主語、目的語などの場合。

5.22 完全他動詞構造。目的語にも上記(5.21)を適用。

5.221 与格動詞構造。保留。

5.23 不完全自動詞構造。*be* 動詞単数(無数)過去形の範列による導入。指：屈折。

5.24 不完全他動詞構造。彙層から不完全他動詞としての *keep* を命令文の述語動詞としての原形、複数主語に対する現在形、および過去形屈折を範列により導入。

5.3 疑問文。単数ないし無数名詞を主語、目的語とする各種疑問文。指：疑問詞には単複による屈折はない。

---

8) 彙層における名詞の有数—無数(あるいは、可算—不可算)の対立、弁別を基本的な事項とする。単数固有名詞、物質名詞、集合名詞などを有数の普通名詞複数と対立、対比させることを眼目とする。

- 5.31 動詞 *have* に限り *do* 先行を排除。
- 5.32 代動詞 *do* が動詞 *do* の原形を従えることを認める。
- 5.4 感嘆—強意表現。
- 5.5 反転表現。代—助動詞 *do*、動詞 *have* および *be* と副詞 *not* との短縮形を認める。
- 5.6 変形。疑問詞 *what* を動詞 *do* の目的語とする疑問文(5.32)に対する応答文は疑問文の文型(完全他動詞構造)に一致しなくてよい<sup>9)</sup>。

## 深度—6

- 6.0 前文表現。
- 6.1 命令文。各種副詞要素——文副詞として——の付加。
- 6.2 叙述文。後出、9.2の法助動詞 *will* の適用により、以下、命令以外の各種表現の未来化[注1]を導入<sup>10)</sup>。指：いずれも動詞が原形であり、命令文と同形である。  
[注1] ここでは、文表現上の「過去」の反対を「未来」とする。
- 6.21 完全自動詞構造。代—助動詞 *do*、*did* にかえて法助動詞 *will* の現在形を適用。意層で文法的未来の意味を導入。指：推量、意志、無意志未来、その他の意味を含蓄。
- 6.22 完全他動詞構造。法助動詞 *will* を単純未来の標示とし、その過去形 *would* をその含蓄形[注1]として、両者ともに意層ないしは彙層の事項として導入。指：主語についての予測の記述、表現でもあるが、同時に話者の推察、意向を表現する。含蓄形ではその度合が大

9) 疑問表現の文型と応答文の文型が同一であるべきことを原則とし、それに対する不整合項目、ないしは慣用と考える。

10) 現在文を一般化するに先立ち「過去—未来」の対立を確立する。現在文の超時間性を考慮し、時制として物理時間に対応させ、過去、現在、未来に三分せず、過去と未来を対照的とし、時間軸を現在意識で二分しておく。他の法助動詞に先立ってここで時制標示として導入する。

きくなる。含蓄形は9.21まで保留してもよい。

[注1] 未来の過去形という論理的矛盾を避ける。

6.221 与格動詞構造。保留。

6.23 不完全自動詞構造。上記を循環的に適用。各種副詞要素の付加。

6.24 不完全他動詞構造。上記と同じ。

6.3 疑問文。主語の意志による未来の表明ではないことを特に明確にするために、*will* に代えて、法助動詞 *shall* を各種疑問文に導入。指：話者と主語が同一の場合（一人称）、主語と聞き手とが同一人の場合（二人称）、主語が第三者（三人称）の場合、主語の人称に拘わらず第三者の意志を含蓄する場合など。

[注1] 法助動詞 *shall* に積極的な意味を持たせず、*will* による主語の意志を意味とすることを排除するための符号である。*should* をその過去形として関連させる必要はない。9.21まで保留してもよい。

6.4 感嘆—強意表現。法助動詞 *will* の過去形 *would*、および *shall* から派生した(敢えて「過去形」としなくてもよい) *should* を強意、感嘆的な含蓄の表現に適用。意層での説明必要。指：9.21まで保留してもよい。

6.5 反転表現。*will* の *not* との短縮形を他の助動詞などの場合と同様認める。

6.51 反転の修飾語的な副詞 *not* に代えて、文副詞 *never* を導入。指：通常助動詞の直前に置く。

6.52 反転を述語動詞で行わず、関係する名詞要素に限定詞 *no* を添加することを導入[注1]。

指：*no*×名詞は通常、単数として動詞を支配するが、複数名詞にも適用する。

[注1] 述語を *not* で反転させるに比して、限定詞 *no* による反転には強意がある<sup>11)</sup>。

6.6 変形。*will*、*shall*、その他の法助動詞9.2による疑問文に対応する応答文の法助動

---

11) 日本語に無い反転法であり、説明を要す。複数も可とする点論理的には矛盾する。



詞は必ずしも前者のそれと同一ではない[注1]。

[注1] 話者が替わるので、違った立場からそれぞれの文の法助動詞を選ぶことになる<sup>12)</sup>。

## 深度—7

7.0 前文表現。独立副詞のうち、話者が表現全体を一括し、あるいは各種の感情的な内容などを、文の形式によらず表現することがある。これらは彙層では感嘆詞あるいは副詞として扱われ、意層でその内容、含蓄が与えられている[注1]。これらを「話者の副詞」と呼ぶことにする<sup>13)</sup>。指：応答の *yes*、肯定、否定の *yes* と *no*、依頼のため *please*、など各種。通常の副詞との意味、用法の区分は連続的である。

[注1] 文本体の一部であるか、独立したものであるかの弁別不確定。

7.1 命令文。話者の副詞を各種適用。

7.11 命令文の総てを強意の法助動詞 *do* および、禁止の代動詞(あるいは法助動詞) *do not* で導く。指：現在時制導入の準備とする——ただし、*be* と *have* には考慮を要す<sup>14)</sup>。

7.2 叙述文。現在時制の導入。指：動詞三単現、および *be* 以外は命令文および助動詞に後接する場合(原形)と同形。

7.21 完全自動詞構文。三人称単数の主語を除く総ての述語動詞に助動詞 *do* を、三人称単数の主語には同じく *does* を適用。指：文層、意層における過去と未来とを超えた次元の事項としての「現在時制」を説明<sup>15)</sup>。

7.22 完全他動詞構造。7.21の適用を任意に変更し、*do* は省略し、*dose* は動詞原形の末尾の標示 *s* に置き換える。(文層では屈折の一つ。)指：現在時制を意味の上でも一つの特殊と

12) 疑問文と叙述文とは相互に派生的であるとするが、疑問文とそれを受けた応答文が2文にまたがって相互に派生的であるとは必ずしもしない。

13) 「話者の副詞」に対して、通常の副詞を「文中の副詞」と呼んでも良からう。

14) 総ての動詞の現在時制には *do*、*does* を内臓するともいう。

15) 英語の現在時制の意味する内容は必ずしも時間軸上の現在ないしその近辺の事としての表現ではなく、むしろその都度、表現との同期を表示する。

して性格付ける<sup>16)</sup>。

7.221 主語と同一物, 同一者を目的語とする場合, 目的語は範列により再帰代名詞をとる〔注1〕。

〔注1〕 文層では一種の呼応と考える。

7.222 与格動詞構造。保留。

7.23 不完全自動詞構造。be 動詞現在の各屈折の範列による導入〔注1〕。

〔注1〕 意味に関係のない, 形式のみの変化であり, 文層では「呼応」とする<sup>17)</sup>。

7.24 不完全他動詞構造。主語と同一者, 同一物を目的語とする再帰目的構造の適用。範列による導入<sup>17)</sup>。

7.3 疑問表現。一般動詞の現在時制での疑問文は *do*, *does* の先行倒置による。be 動詞の場合は単純な倒置による。疑問詞による場合も同じ。

7.4 感嘆一強調表現。be 動詞以外の構造は法助動詞としての *do*, *does* の適用による——倒置を含まず。

7.5 反転表現。一般動詞の場合は *do*, *does* を副詞 *not* で後置修飾する。文副詞 *never* の場合は *do*, *does* は適用せず。

7.51 be 動詞の場合も *not* の後置修飾による。*have* には両用ある。ただし *never* による場合は *do*, *does* によらない。

7.6 変形。挿入的に, あるいは付加的に, 統語的には主節であるべき構造を付加することができる。指: 一つの完結した文の前後, 中間に *I think*, *it seems*, などを加え, 表現に「話者の副詞」に似た効果を添える。

---

16) 現在時制を一般的, 無標示な原型とする通常のかたを取らない。現在時制による事物の認識と伝達の方が抽象度が高い。

17) 意味の変化を伴わない形式だけの屈折は論理的に無用なもので, 外国人学習者には馴染みがたい。了解の上, 受容させるべきこととする。

## 深度— 8

### 8.0 前文表現。

8.1 命令文。各種命令文に副詞要素として前置詞句を導入[注1]。文層，意層の事項として，また明確な文副詞として命令の諸条件[注2]を付加する。指：形容詞要素としての用法は10.23まで保留<sup>18)</sup>。

[注1] 文層の事項としては「包接」の一つである——前置詞は名詞要素を従えて1単位の要素（この段階では副詞要素）となる。

[注2] 時，処，方向，方法，状態，理由，目的，などの条件。前置詞それぞれに，彙層において固有の意味を与えてある。

8.11 前置詞が代名詞を従える際，代名詞は目的格[注1]をとる。

[注1] 前置詞に包接された名詞要素は「前置詞の目的語」といわれている。

### 8.2 叙述文。

8.21 完全自動詞構造。文層あるいは統層の事象として，前置詞句を文頭，述語動詞句の後などに配置。指：文副詞として被修飾部への近接度の違いによる修飾力[注1]の及び方の異同。ただし，ここでは後出の形容詞的用法10.24と紛れぬよう，名詞要素の後位は避けておく。

[注1] 文副詞の叙述的「修飾」の支配。

8.22 完全他動詞構造。与格動詞の間接目的語にあたる名詞要素を，前置詞句にして目的語の後位に。指：その為の前置詞は *to* もしくは *for* としておく。与格動詞構造への準備。

8.221 与格動詞構造。保留。

8.23 不完全自動詞構造。名詞補語を導入[注1]<sup>19)</sup>。指：補語として形容詞で修飾されてい

18) 前置詞句の形，副両用を前提とするが，先ず副詞用法を定着する方を採った。

19) 名詞補語の導入をこの段階まで保留したのは，補語と目的語との弁別の確立のため。また繫辞，あるいは等号としての *be* 動詞による主語と名詞補語との同定は表現としては高度ともいえる。

る名詞を与え、その名詞を捨象するなどにより形容詞補語との弁別、関連を示す。

[注1] 現実には、*be* 動詞以外に余り適用はない。補語には形容詞と並んで名詞要素が立つ<sup>20)</sup>。

8.231 名詞補語を代名詞に置き換える際は主格のままとする<sup>21)</sup>。

8.24 不完全他動詞構造。同様に名詞補語を導入。指：後出の間接目的語10.1との混乱を避ける。補語としては自動詞補語と一般化しておく<sup>22)</sup>。

8.241 目的格補語を代名詞に置き換える際は、自動詞構造の場合と同様、主格のままとする。

8.3 疑問文。前置詞句の目的語を疑問詞とした疑問文が可能。またその際、前置詞を文末に残すことも可[注1]。

[注1] 前置詞が名詞要素に先行し「包接」という原則からの逸脱、倒置、変形ともいえる。

8.31 名詞補語を疑問詞(疑問代名詞主格)とする疑問文が自動詞、他動詞いずれの構造にも適用<sup>23)</sup>。

8.4 感嘆—強意表現。

8.5 反転表現。前置詞句の反転は副詞 *not* の前置詞による。指：ただし、*not* の文副詞との弁別は不確定。

8.6 変形。ある種の文副詞は代名詞化し、特定の前置詞の目的語になる[注1]。

[注1] 例えば *from* などは *where* を包接できるが、*to* は出来ない。

8.61 不完全他動詞構造における名詞補語(いわゆる「目的補語」)は特定、数などの標示

---

20) 補語の名詞、形容詞二者択一性を前提としつつも、ここまでは形容詞のみ与えてきた。

21) 補語を英文法で「補格」としない一つの理由でもあろうか。ただし、現実には、強調されれば慣用的に目的格が使われる。

22) 自動詞補語と他動詞補語の同一性を明確にする。目的語と補語との間に不完全自動詞が潜在する。

23) 不完全自動詞構造の場合、疑問代名詞が主格で現れるため、補語を未知とするのか主語を未知とするのか明確を欠く。

を欠くことがある<sup>24)</sup>。

8.62 代名詞補語は強意的,あるいは慣用的に目的格になることがある。

## 深度—9

9.0 前文表現。

9.1 命令文。該当せず——この項で導入予定の法助動詞による命令は成立しない[注1]。

[注1]強意の助動詞 *do* を法助動詞とするかどうかには問題は残る——疑問,打消しに用いた *do*, *did* は代動詞とした。

9.2 叙述文。法助動詞各種[注1]を以下範列により導入。

[注1] 法助動詞は彙層では有限群に属す<sup>25)</sup>。

9.21 完全自動詞構造。既に導入した *do—did* (2.12), *will—would* 6.21, *shall—should* 6.3, に準じて,現在形—過去形の対を為している法助動詞各種を導入。それぞれの一般的な意味は彙層で与えてある。

9.22 完全他動詞構造。現在形—過去形対応の不備な法助動詞——例えば *must* などを範列により循環的に導入。それぞれの意味を彙層で与える。

9.221 与格動詞構造。保留。

9.23 不完全自動詞構造。*to* の介在を要する法助動詞——例えば *used*, *ought* などを範列により循環的に導入。指：*need*, *dare* などは *to* を伴う場合,伴わない場合などがあり,不安定<sup>26)</sup>。

24) 目的語と目的補語との間に潜在する従属節が副詞的であることの証左ともいえる。

25) 法助動詞と原型動詞の接続はいわば「動詞句」であり,動詞分節を構成する。考え方によれば,動詞の語頭変化ともいえる。

26) 法助動詞の一部は流動的な段階にある。現実英語には短絡形 *wanna*, *gonna*, *oughta*, *useta* などの例もある。

9.24 不完全他動詞構造。法助動詞による表現は主語についての叙述に加え、話者の意向を表出する——6.22で触れた。

指：特に過去形に由来する法助動詞は「含蓄形」といえる。

9.3 疑問表現。法助動詞の文頭への倒置による。疑問詞による場合は疑問詞が先頭に、ついで法助動詞となる。

9.31 *to* の介在を要する法助動詞の疑問文には不自然、不安定な場合がある<sup>26)</sup>。

9.4 感嘆—強意表現。上記の含蓄形による強調。

9.41 一般に法助動詞の過去形は含蓄（6.22）ないし「えん曲」形であり、一種の強意でもある。

9.5 反転表現。副詞 *not* の後置による。

9.6 変形表現。法助動詞による疑問文に対する応答文は必ずしも同じ法助動詞を使うことにはならない。（6.6）

9.61 *to* の介在を要する助動詞の範列としての不整合性。（9.23）

## 深度—10

10.0 前文表現。前置詞句のうち感嘆詞的に[注1]固定したもの——例えば *by all means*, *not at all*, *of course*, *by the way* などを導入。

[注1] 文中では話者の副詞ともいえる。指：この項10.24, 形容詞的前置詞句への準備。

10.1 命令文。与格動詞構造<sup>27)</sup>。間接目的語の導入。指：間接目的語を含むものとして上記8.22で導入した副詞的前置詞句の前置詞を排除。逆に間接目的語に適切な前置詞を包接、前置詞句化して文型の束縛から解く。この深度で導入予定の事項を予め命令文で導入して置く。

---

27) 与格動詞構造は、口語的にはかなり頻度の高い文型であるが、その文語での衰退に鑑み、こままで保留してきた。

10.11 間接目的語は通常、動詞の直後。代名詞の場合は目的格をとる[注1]。直接目的語[注2]の後に倒置することもある。

[注1] 与格屈折が無い<sup>28)</sup>。

[注2] 完全他動詞の目的語を、ここでの間接目的語に対してこういう。

10.2 叙述文。

10.21 完全自動詞構造。

10.22 完全他動詞構造。

10.221 与格動詞構造<sup>29)</sup>。主語と同一者、同一物が間接目的語の場合も再帰代名詞となる。両目的語が共に代名詞の場合、弁別不確定。指：弁別困難な場合は間接目的語を前置詞句化(文副詞化)して文体的に問題を避ける。

10.23 不完全自動詞構造。ここまでは、副詞要素として来た前置詞句を、初めて形容詞補語として循環的に導入<sup>30)</sup>。

[注1] 副詞的前置詞句との弁別は必ずしも確定的でない。

10.24 不完全他動詞構造。前置詞句を形容詞的目的補語として、および主語、目的語、名詞補語に対する後置形容詞修飾要素として循環的に導入[注1]。指：文副詞としての前置詞句との弁別不確定。

[注1] 前置詞句に限らず、包接による形容詞要素は名詞要素を前置修飾できない。

10.3 疑問文。形容詞補語としての前置詞句に対する疑問形容詞は *how* で作る。

10.31 修飾的形容詞としての前置詞句を疑問詞とする命令文は成立しない<sup>31)</sup>。

28) ドイツ語などでは未だに独立した屈折を持つという。

29) ここでは完全他動詞構造(上記, 10.22)の一変種として導入、ただし一般的な五文型理論では第四文型として独立させる。

30) ここでは形容詞性を対比的に強調するために、先ずいわゆる「叙述的用法」——即ち形容詞補語として導入する。他の補語としての一般形容詞との互換性も当然ある。

31) 禁止項目で総ての可能な生成を防止することは事実上不可能であり、可能かつ予想される生成のうち不成立なものを適宜排除、予防するにとどまる。

10.4 感嘆—強意表現。強意のため、副詞もしくは形容詞であるにも拘わらず、前置詞句を先行仮主語 *it* で予め代理させ、節の残部を *that* 節で補うことができる。指：ただし、11.23 まで保留してもよい。

10.5 反転表現。前置詞句の反転は副詞 *not* の前置修飾による。節の副詞との弁別不確定。

10.6 変形。前置詞の目的語である名詞要素が各種の省略[注1]を伴う。指：形容詞、副詞いずれの用法にも起こる。

[注1] 主として(1) 限定詞、数標示の省略、(2) 名詞要素が省略され前置修飾した形容詞(特に最上級など)の残留など。

12.61 名詞的目的格補語は後述の受動形17.23では副詞的前置詞句の目的語などになりやすい。

## 深度—11

11.0 前文表現。

11.1 命令文。副詞節[注1]の導入。節構造をなす組成を、従属接続詞によって包接して副詞節とし、命令文に各種の条件を付加する。各従属接続詞の一般的意味は、假定、時、処、方法、理由、根拠、その他で、いずれも彙層で与えてある<sup>32)</sup>。

[注1] 文層の事項としては従属接続詞による包接である。

11.2 叙述文。

11.21 完全自動詞構造。副詞節を循環的に適用。指：位置は文頭、主語の後位、文末。任意個、任意の順序(文体的選びとする)で。

11.22 完全他動詞構造。各種副詞節の循環的適用。動詞と目的語の間以外の位置に任意数、任意の位置に。指：名詞節の導入は11.3まで保留。

---

32) 副詞節の意味が従属接続詞それぞれにより明確なので名詞節、形容詞節に先立ち導入する。



11.221 与格動詞構造。

11.23 不完全自動詞構造。名詞補語として一般的な従属接続詞である *that* に包接された名詞節を導入[注1]。指：主語たる名詞要素は *that* が包接する節の叙述をそのまま予め名指す *the* などで特定された名詞要素，例えば *fact*, *idea*, *problem* などに限られる<sup>33)</sup>。

[注1] *that* に包接される節の用法が不確定なので，先ず名詞補語として，上記 *the fact* などのような意味をもった名詞要素，この場合は主語との潜在的な同格関係を立てておく<sup>34)</sup>。

11.231 不完全自動詞構造の主語として適用，ただし代名詞 *it* を先行，仮主語とし，同格名詞要素として *that* 節を後置する[注1]。

[注1] この *it* は潜在的には上記の *the fact* などを文外のことがらとして指示している。指：*that* 節をそのまま主語として文頭に置いても「非文」とはしない。

11.24 不完全他動詞構造。目的語を上記と同様に「仮目的語」*it* を立て，補語の後位に *that* の包接する同格名詞節を配す。

11.3 疑問文。完全他動詞構造による疑問文（与格動詞によるものも含む）の目的語に *that* 節を循環的に適用[注1]。

[注1] 目的語の場合は先行 *it* による構文は避ける。

11.4 感嘆—強意表現。上記11.231, 11.24の仮主語構文も一種の強意である。

11.41 従属接続詞 *if* あるいは *though* で包接された副詞節を強意の副詞 *even* により前置修飾し，いわゆる「逆態の条件」を示す。

11.5 反転表現。従属節——副詞節，名詞節（後述の形容詞節を含む）は修飾，限定できない，よって副詞 *not* で反転することもできない。

11.6 変形。文層事項として，「呼応の副詞節」の導入[注1]。

[注1] 主文に含まれる程度，方法の副詞 *so* の内容を程度，目的，結果などについて追加的に説明す

33) 従属接続詞としての *that* には彙層でいう意味も，文層でいう指示物も無い。

34) *that* の文法的多義性に鑑み，ここでは純粹な従属接続詞として先ず導入しておく。

る為にそれを叙述した節を *that* で包接して文末に付加する<sup>33)</sup>。

指：*so* が倒置されて *that* の直前に置かれて、慣用的に結合し、一種の等位接続詞に準じて使われることもある。

11.61 副詞節の内部では省略が幅広く行なわれる。

11.62 文中の名詞節は不可算、無数であり、その代名詞化は単数、主として *it* による。

## 深度—12

12.0 前文表現。

12.1 命令文。条件の副詞節のうち、疑問代名詞、あるいは疑問副詞に *—ever* を接尾させた形の従属接続詞で包接したものを導入[注1]。節中の要素の代名詞もしくは副詞の代理でありつつ、節の前頭に倒置され(主語の場合はそのまま)、節を包接する——従属接続詞を兼ねる<sup>35)</sup>。指：人代名詞の場合には屈折がある。

[注1] 副詞としては考慮の範囲内にある「主文の成立に無関係」な条件を呈示する。

12.2 叙述文。

12.21 完全自動詞構文。統層で主語たる名詞要素の後位に、平行的、挿入的に、同一の事物、人物に代名詞で言及した文を付加する。その際その代名詞に疑問代名詞と同じ形をした語——関係代名詞——を範列により、挿入部の先頭に倒置する[注1]。指：人代名詞の場合には屈折がある。

[注1] いわゆる「非制限的」関係代名詞の用法で、一種の連文である。従属節に準じたものとして扱う。

12.22 完全他動詞構造。上記を目的語に循環的に適用。

12.221 与格動詞構造。間接目的語にそえて、関係代名詞(ただしこの段階では *what* 以外)

---

35) 後出する関係代名詞と類同の操作である。この種の機能の合併現象がいわゆる「関係代名詞」などの用語の「関係」の意味するところといえる。ただし副詞と同形の従属接続詞は包接した節内の副詞でもあり、関係詞の一種といえないことはない。

[注1]の関係代名詞で導かれた挿入文(節)を導入し、それを一つの名詞分節として自立させ[注2], 両者の間に同格関係を立てる。

[注1]事物代名詞の場合は *which*, 人代名詞の場合は *who* に、この段階では限られる。また、先行詞を含む事物関係代名詞 *what* および、特定関係詞としての *that* は13.6まで保留する。

[注2] 文層事項としては、関係代名詞が節を包接する——従属接続詞を兼ねることである<sup>36)</sup>。

12.23 不完全自動詞構造。主語, 補語, 前置詞の目的語である名詞要素などに同格の名詞節を配し, 用法を一般化する。 指: 関係代名詞節の形容詞化への準備。

12.24 不完全他動詞構造。主語, 目的語に上記の同格関係代名詞節を循環的に適用。

12.3 疑問文。

12.4 感嘆—強意表現。上記12.0の副詞節は強意にも使われる。指: *whether* は従属接続詞である——関係詞ではない。

12.5 反転表現。同格的関係代名詞節は——一般に従属節は修飾を受けない——修飾されない, よって *not* あるいは *no* により反転できない<sup>37)</sup>。

12.6 変形。目的格の関係代名詞は口語では省略できる。 指: 関係代名詞に関する変形的な手続:

- (1) 一種の挿入的な連文構造を文内の従属節として取り込む。
- (2) 代名詞が従属接続詞の機能を兼ね, 節の前頭へ倒置される。
- (3) 名詞的同格節を, 次第に先行詞たる名詞要素の後置修飾のごとく扱う。
- (4) 疑問詞, 関係代名詞, 関係副詞などの範列上の不備, 不整合性。

## 深度—13

13.0 前文表現。

36) 関係代名詞を通常の導入によらず, 先ずいわゆる「先行詞を含む関係代名詞節」を先行詞と同格の名詞要素として導入, 制限的含蓄の定着をまって, 制限的, 形容詞節へと移行する。

37) 一般に語句による従属節の修飾は起こらない。

13.1 命令文。文層における副詞節の「呼応」。命令文中の形容詞、副詞などに程度の標示がある場合、特定従属接続詞に包接された副詞節でそれを付加的に説明記述する[注1]。

[注1] 主文での標示は、*so*, *as*, あるいは *such* および比較の *more*, *less* (強変化の場合は比較級) などとし、それに「呼応」する従属接続詞は、*as* (副詞の *as* と同形である), *that*, *than* (比較の対象を叙述する節を包接する) などとする。

13.2 叙述文。

13.21 完全自動詞構造。いわゆる「先行詞を含む関係代名詞」を主語である名詞要素に循環的に適用。先行する名詞要素が無く、名詞的關係代名詞節が独立する場合に限り、事物代名詞は *which* に替えて *what* とする[注1]。

[注1] 疑問詞としての *what* との弁別不確定<sup>38)</sup>。

13.22 完全他動詞構造。上記を目的語にも循環的に適用。前置詞の目的語にも適用。先行詞が代名詞の場合は特に修飾的としない。指：同格の名詞節とする。

13.221 与格動詞構造。直接、間接いずれの目的語にも、また統語的には両目的語同時に名詞的關係代名詞節が適用。間接目的語の場合前置詞で更に包接して副詞要素にできる<sup>39)</sup>。

13.23 不完全自動詞構造。名詞補語の同格名詞節として所有格關係代名詞の包接する名詞節を循環的に導入。この場合先行する名詞要素は不可欠[注1]。

[注1] 名詞要素として独立できない以上、修飾的、しかも形容詞的としか言わざるを得ない<sup>40)</sup>。

13.24 不完全他動詞構造。

13.3 疑問文, 13.4 感嘆—強意表現, 13.5 反転表現。

13.6 変形。

---

38) その他関係詞でも同様な矛盾ありとする。

39) このような組成は句であり、節を重層的に内包していても節としない。

40) 關係代名詞がこのような所から形容詞性を強めたのであろう。従属節に形容詞用法を欠く点、不整合であるが、なお制限的關係代名詞節を形容詞要素とする一般の考え方に必ずしも従えない。そのような關係代名詞節は補語に立つと明らかに先行詞を含む名詞的關係代名詞節に還元される。

- (1) 関係代名詞節は必ずしも先行詞に直接連節接していなくてもよい。
  - (2) 目的格関係代名詞および前置詞の目的語に対する目的格関係代名詞は口語では省略される——ただし後者では前置詞は動詞の後に残留する。
  - (3) *who* の目的格は口語では無変化形でよい。
  - (4) 先行詞が副詞的な意味を持つ名詞の場合、関係詞は *which* に替えて、いわゆる「関係副詞」*when, where* などとする<sup>41)</sup>。
  - (5) 先行詞たる名詞的要素が排他的に限定されている場合[注1]に限り関係代名詞は *which* などに替えて、「特定の *that*」とし、その節の述語動詞を先行詞のそれに呼応させる<sup>42)</sup>。
- [注1] 限定詞、および排他的であるとされる *only, every, each* などで限定されている場合。

## 深度—14

### 14.0 前文表現。

14.1 命令文。命令文の目的語、名詞補語および前置詞句の名詞要素に、文層の準動詞構造の一つである、統語的動名詞句[注1]を循環的に導入する<sup>43)</sup>。形容詞による修飾をうけない[注2]。指：後出の現在分詞の語形—*ing* と同形<sup>44)</sup>。

[注1] 単語としての動詞が—*ing* 屈折をすることにより、目的語、補語、などの統語的な下位の要素を節に準じて従え、一括して名詞要素となっていること。

[注2] 従属節の場合と同様に、動名詞構造も統語句の場合は外から——前置的に——形容詞の修飾を受けない。

### 14.2 叙述文。

14.21 完全自動詞構造。主語にも統語的動名詞句を循環的に適用。名詞句として形容詞修飾を受けない(ただし *not* に限り前置する)代わりに、動名詞そのものを句内副詞で修飾できる。

41) これらの節そのものは名詞節ないしは、形容詞節である。

42) 単語としての *that* のこのような文層、彙層における多義性が混乱の原因である。なお、この *that* には代名詞として文中にその指示物がある点が特殊である。

43) 準動詞構造各種のうち、ここでは動名詞構造を先ず定着させ、またその動詞性を名詞性より先に定着させる。準動詞各種の弁別、対比は逐次行う。

44) *ing* の屈折語尾としての二義性も一つの体系的矛盾である。いずれにしても語尾変化が一種の包接の標示であるとも考えられる。

14.22 完全他動詞構造。目的語に動名詞構造を適用。動名詞そのものの行為者を、代名詞所有格で句を前置限定することにより明示できる[注1]。

[注1] 上記14.1にいう一般形容詞の前置による場合とは異なる(定冠詞あるいは *no* などの限定詞も前置可能。)

14.221 与格動詞構造。兩種目的語に循環的に適用。指：統語的名詞要素である動名詞句は無数名詞であり、代名詞化される際は *it* となる[注1]。

[注1] 一般的に従属節の場合と同様に無数となる。

14.23 不完全自動詞構造。名詞補語に文法的動名詞[注1]を循環的に適用。句外から副詞的修飾を受けない。指：14.1の反対。

[注1] 動名詞が完全に名詞化し、単語として形容詞、限定詞などで修飾され、あるいは数による屈折を伴うなどすること。

14.24 不完全他動詞構造。名詞的目的補語に上記14.23の文法的動名詞句を循環的に適用。所有格代名詞の前置により動名詞の「意味上」の主語を明示することができる。指：副詞で前置修飾できない——もしその副詞を後置すれば、自動的に統語句になる。

14.3 疑問文。統語的動名詞句、文法的動名詞句共に前置詞の目的語となる。

14.4 感嘆—強意表現。

14.5 反転表現。統語的動名詞句は句中の *not* あるいはその前置修飾により反転。文法的動名詞句は限定詞 *no* の前置による反転が可能。

14.6 変形。他動詞に由来する統語的動名詞句内の目的語を無数化し先頭に倒置、慣用的に一語化して(ハイフンで結ぶ)文法的動名詞句、ないしは単語名詞とする<sup>45)</sup>。

指：彙層の事項である。

---

45) 造語法レベルのことであるが、変形として言及しておく。後出の現在分詞との関連で、例えば *teaching teachers* のような接続の多義性を予め避ける。

深度—15

15.0 前文表現。

15.1 命令文。

15.2 叙述文。

15.21 完全自動詞構造。

15.22 完全他動詞構造。

15.221 与格動詞構造。

15.23 不完全自動詞構造。補語たる形容詞要素に、文層の準動詞構造の一つである、統語的現在分詞句[注1]を循環的に導入する[注2]<sup>46)</sup>。指：上記14.1 動名詞の屈折—*ing*と文法的にも同形異義である。

[注1] 単語としての動詞が—*ing* 屈折することにより、目的語、補語など統語的な下位要素を節に準じて従え、一括して形容詞要素となっていること。同じく一種の包接<sup>47)</sup>。

[注2] 不完全自動詞が *be* の場合に限り、「進行形」という<sup>48)</sup>。

15.24 不完全他動詞構造。統語的現在分詞句を形容詞的補語に循環的に適用。

15.3 疑問文。統語的下位要素を従えない現在分詞を文法的現在分詞とし、単語形容詞に準

46) 準動詞構造の導入順序を動名詞構造に次いで現在分詞とした。—*ing* 屈折の名詞用法と形容詞用法と考えることもできる。学習者にとって、これが文法的同形異義なのか、異義同形なのか定かでない。

47) 動名詞構造と同じく、—*ing* 標示による一種の包接でもある。日本語のいわゆる「入れ子型」の裏返しである。

48) 心理的事実はともかくとして、ここでは、一般的に行なわれている *be+ing* を結合させて、動詞の屈折形の一つとする考えを、教授法としては採らない。特に邦文の訳文上で定動詞表現のそれと干渉を起こすので避けたい。例えば「—を見る。」と「—を見ている。」など、日本語自体の弁別の不確定さを持ち込む。

じて補語に適用する。いずれの場合も、名詞要素の修飾に立つことができる。一般に後置修飾するが、文法的現在分詞は前置できる。副詞修飾は (*not* を除き) 句内的に行う。

15.4 感嘆—強意表現。文中の名詞要素を統語的及び文法的現在分詞句で後置修飾<sup>49)</sup>。

15.5 反転表現。*not* あるいは *never* の前置修飾による。指：主節の副詞としての *not* あるいは *never* との弁別不確定。

15.6 変形。現在分詞構造——統語的、文法的に拘わらず、文副詞として独立的に用いる[注1]。その副詞的意味は完具した副詞節に置に換え、明示できる。指：「話者の副詞」として主節の内容とは無関係な副詞分節となる。意味上の主語が不明確な——いわゆる「懸垂分詞」のことも多い。

[注1] いわゆる「分詞構文」である<sup>50)</sup>。

15.61 副詞的に用いられた統語的及び文法的現在分詞句の意味上の主語を明示する必要——例えば主文の主語、あるいは直前の名詞要素と一致しない場合など——であればそれを挿入できる。指：代名詞の際は主格。

[注1] いわゆる「分詞構文の主語」。統層では挿入、もしくは構文内の副詞分節とする。

15.62 統語的な動名詞構造、統語的な現在分詞構造が、統語的な下位要素を従えない場合、それらの文法的構造との弁別が不確定となる。

## 深度—16

### 16.0 前文表現。

49) 現在分詞構造に一般の形容詞と同じく、叙述用法(補語として)および修飾用法の両用あることを明確にする。

50) *go hungry* などのような、一般的に起こる形容詞要素の文副詞化の一つといえる。現代にも、形容詞、副詞の未分、ないし同形の語群——例えば、接頭辞 *a* を持つ語群——が残存していることも事実である。これらは「疑似補語」とでもいうべき分節、要素となり、「疑似不完全動詞構造」とでもいうべき文型、例えば *die asleep*, *catch it alive* などを呈し、完全、不完全の弁別を崩すので、この段階で導入すべき事項としない。



16.1 命令文。

16.2 叙述文。

16.21 完全自動詞構造。

16.22 完全他動詞構造。

16.221 与格動詞構造。

16.23 不完全自動詞構造。*be* 動詞の形容詞補語に自動詞の統語的過去分詞構造——以下、完了分詞句という——を適用[注1]。完了分詞の屈折による標示は文層で範列により与える。指：完了の意味は準動詞各種間の弁別として、範列で与える——現在分詞の担う相に対して、および後出の不定詞の担う相とも対比することとなる。ただし、用途は *be* 動詞の場合などに限られている<sup>51)</sup>。

[注1] 動詞自体が自動詞であるから統語的下位要素は完全自動詞では副詞要素のみ、不完全自動詞の場合、下位要素は理論的には補語と副詞要素となるが、*be* 動詞が接続することはない。

16.24 不完全他動詞構造。完了分詞構造は統語句、文法句いずれも形容詞的目的補語である。

16.241 統語的完了分詞構造は名詞要素を後置修飾できるが、文法的完了分詞句は特に1単語の場合は、名詞要素を後置修飾できない。

16.242 文法的完了分詞は単語形容詞として名詞を修飾しない。ただし一般形容詞に準じて名詞要素を前置修飾できるもの——例えば、*devote*, *stray*, *fall* など——もある。(17.65)

16.3 疑問文。完了分詞句などを疑問詞とした疑問文は作れない<sup>52)</sup>。

51) ここでは、後出の助動詞 *have* との結合による、いわゆる「完了形」の一変種とする考え方を採らない。むしろ *be* 動詞の形容詞補語の一つの相として、現在分詞、後出の不定詞の相などと対比すべきものとする。

52) *He is gone.* あるいは、*He is sleeping.* を予期して *How is he?* とはいわない。

16.4 感嘆—強意表現。統語的完了分詞構造は統語的な下位要素による内部的な修飾のみ可能。

16.5 反転表現。完了分詞構造——統語的、文法的いずれも——の反転は *not* の前置のみによる。ただし、その所属する節の否定の副詞——*not*, *never*, *little* など——との弁別は不確定である<sup>53)</sup>。

16.6 変形。完了分詞構造は分詞構文的な副詞要素にはならない[注1]。

[注1] 上記現在分詞構造(および後出17.23の受動分詞)との重大な相異点である。完了相を担う分詞構文は後出の助動詞 *have* + 完了分詞19.21まで保留。

## 深度—17

17.0 前文表現。

17.1 命令文。

17.2 叙述文。

17.21 完全自動詞構造。

17.22 完全他動詞構造。

17.221 与格動詞構造。

17.23 不完全自動詞構造。形容詞補語に受動分詞構造[注1]を適用<sup>54)</sup>。*be* 動詞の補語に統語

53) 一般的に統語的な組成を持つ節や句は外からの修飾を受けがたい。

54) 他動詞のいわゆる過去分詞には本来、受動相——厳密には受動態——と完了相との二義性ないし矛盾がある。これを分離し、受動の「態」を担う派生形容詞であるとし、他動詞を語源とする一種の形容詞であると考えることとする。他方、完了を担わせる他動詞のいわゆる過去分詞は分詞構文をつくらず、また形容詞要素として前置、後置に拘わらず、名詞要素を修飾できない点をより大きな矛盾とする。いずれの場合も統語的な下位要素を従える点がやはり矛盾する。一種の包接とも考えられる。体系としての英語の顕著な不整合である。

的受動分詞（その統語的下位要素があれば、それを含め）を従える場合に限り「受動型」あるいは「受け身型」という文構造であるという。指：その統語的下位要素は当然の事として、主語となった目的語を失う。与格動詞構造の場合は他方の目的語が、不完全他動詞の場合には目的補語が残留する<sup>55)</sup>。

[注1] 他動詞が屈折により、主客転倒して、受動の意味（「相」といわず、「態」という）を担う、動詞を語源とした一種の形容詞となったもの<sup>56)</sup>。

17.24 不完全他動詞構造。目的補語に統語的受動分詞句を適用。指：他の不完全他動詞構造の場合と同様に、目的語と受動分詞句の間に不完全自動詞構造が潜在する。ただし、用途には限界がある。

17.3 疑問文。主語、目的語、補語などの名詞要素を統語的受動分詞句で後置修飾する。指：形容詞要素として、叙述機能——補語であることと、名詞要素に対する修飾機能の双方を備えていることを明確にする。

17.31 文法的受動分詞（その分詞一語、もしくは副詞による修飾を受けた分詞句）は名詞要素を後置、あるいは前置修飾できる。

17.32 受動分詞の副詞的修飾は単語あるいは、文法句であれば外部的にも、内部的にも可能、統語句の場合は内部的にのみ可能。

17.4 感嘆—強意表現。

17.5 反転表現。統語的受動分詞句も、文法的受動分詞句の反転も *not* の前置修飾による。節の否定副詞 *not*, *never* などとの弁別は不確定。

17.6 変形。受動分詞構造も統層で副詞要素となり、いわゆる「分詞構文」になる。

17.61 現在分詞と異なり、受動分詞による分詞構文に、いわゆる「分詞構文の主語」を直接

55) このような残留した目的語に限り、「保留目的語」という名称がある。ただし、「保留補語」とは  
いわない。

56) 統語的下位要素を包接しなければ、「受動形容詞」とでもいうべきところ。

付加できない。

17.62 「受動の文詞構文」は一般に *be* 動詞の現在分詞構文——上記15.6——から起こし、その形容詞補語として受動分詞句を含めることが多い。また、意味上の主語も、その現在分詞構文の主語として組み込むことができる。

17.63 上記16.23の完了分詞とそれが従える前置詞句の前置詞のみと結合して、他動詞に準じた扱いをし、本来はその前置詞の目的語である名詞要素を統層の目的語とした完全他動詞とみなし[注1]、それに対応する「疑似受動分詞」、およびそれと *be* 動詞との組み合わせによる「疑似受動型」が慣用的に許されている。指：そのような疑似受動型に残留する前置詞は副詞として処理する他はない<sup>57)</sup>。

[注1] 受動型を派生しない限り、この矛盾は表面化しない。

17.64 本来、動詞でも他動詞でもない要素(主として名詞)に受動分詞の標示である屈折——*ed*, *en* など——を付し、受動分詞ないし形容詞に準じた扱いをする。文層では「派生」の一種である。

17.65 自、他両用の動詞の過去分詞について完了分詞か受動分詞か分明的でないもの——例えば *devoted*, *learned*, *soft-spoken* など——がある。指：いずれも、必要ならば慣用として認めるより他はない。

## 深度—18

18.0 前文表現。

18.1 命令文。

18.2 叙述文。

---

57) 英語の現実ではあるが、学習の初期段階で強いて導入する根拠は薄弱である。

18.21 完全自動詞構造。統語的不定詞構造[注1]を統層で、副詞要素[注2]として導入<sup>58)</sup>。toは前置詞とせず、一種の語頭屈折ないし接頭辞とし、(-ing, -ed, -enなどを接尾辞的屈折としたのに対応する)、例えば当初はハイフンで連結して与える。

[注1]語源的には前置詞である to を冠した原形動詞とその従える統語的下位要素を一括して包接したもの——原形動詞は名詞的であったとする。不定詞構造ないし不定詞句は統語句であり、文法句にならない。

[注2]不定詞句の文副詞としての意味——理由、動機、目的、予見、結果など——は、副詞節に還元して定める。相として現在分詞、完了分詞、受動分詞、などの担う相の意味と弁別。話者の副詞として節から独立することもある。

18.22 完全他動詞構造。ここでは不定詞句を名詞要素として目的語に適用することを18.6まで保留する[注1]。指：上記の意味の副詞要素として、文頭、文末、主語の後に付加、ただし、他動詞と目的語の間は避ける。文副詞、話者の副詞などを適宜に適用。

[注1]名詞用法としての導入を最後に回すため。

18.221 与格動詞構造。上記同様、間接目的語への適用を控える。

18.23 不完全自動詞構造。不定詞句の形容詞的用法の導入。不定詞句を形容詞補語に適用<sup>59)</sup>。指：be以外の用法に限界がある。上記の副詞用法との弁別が、look, seem, appearなどの場合特に不確定となる。

18.231 形容詞的不定詞句による名詞要素の後置修飾を循環的に適用。不定詞句そのものの修飾は内部副詞によってのみ可能。指：先行する名詞要素が、それを修飾する不定詞構造の潜在的統語要素の何に当たるかに留意。前置詞句の目的語にあたる場合には前置詞が必要<sup>60)</sup>。

58) 不定詞構造を先ず文副詞として定着させ、次いで形容詞要素として、最後に名詞要素として導入する。動詞の名詞派生の主流を動名詞構造に、形容詞派生の主流を各種分詞構造に、それぞれ振り当てて来たので、残った準動詞構造である不定詞構造を先ず副詞派生の主流として確立する。不定詞の導入をこの段階まで保留してきたのもそのための考慮から。

59) 一般に一種の慣用的未来時制として与えている be + to 不定詞を、むしろ不完全自動詞としての be が形容詞補語として従える他の準動詞句——現在分詞構造、完了分詞構造、受動分詞構造——と並ぶものとし、それぞれの担う相を対比的に示す。不定詞の担う未然、抽象、原則、当然などの相を明確にする。

60) この残留前置詞は、13.6の関係詞節の場合と類同する。分析としては副詞とする他はない。

**18.24** 不完全他動詞構造。形容詞的目的補語に不定詞構造を導入。ただしこの場合に限り、標示である *to* を排除する。指：よって、目的語の後位の *to* 付きの不定詞句は原則として統層での副詞要素とする<sup>61)</sup>。

**18.3** 疑問文。不定詞句を疑問詞にした疑問文は成立しない。

**18.4** 感嘆—強意表現。不定詞構造の意味上の主語は内部的前置詞句、例えば *for* の包接する副詞句の前置修飾による。ただし、それが内部的修飾か外部的修飾かの弁別不確定。文中副詞としてのみならず、話者の副詞ないし前文表現として、孤立的に用いられることもある。

**18.5** 反転表現。不定詞構造は他の準動詞構造と同様、*not*, *never* などで前置修飾的に反転する。指：節の副詞（統層での副詞要素）との弁別はやはり不確定。

**18.6** 変形。不定詞構造は特殊な場合[注1]、名詞句として用いることができる<sup>62)</sup>。指：他の用法との弁別のため、当初は名詞用法の不定詞句には引用符を施して与えるなど工夫する。  
[注1] 各種の名詞的用法、あるいは形容詞的用法があるが、副詞として取れる限りは副詞的要素として解釈することを原則とする<sup>63)</sup>。

**18.61** 不定詞の従える下位統語要素を疑問詞に換え、先頭に倒置し、名詞句[注1]とする。  
[注1] いわゆる「疑問詞付き不定詞」。先行する疑問詞を代名詞に、後続の不定詞句をその形容詞修飾要素としないでおく。

**18.62** 代名詞 *it* を仮主語として先行させ、その同格的名詞句として不定詞句を後置し、文体的強意が可能[注1]。指：上記18.4 では名詞的用法が未導入であったので保留した。

[注1] いわゆる「強調構文」の一つである。

61) 目的語を後置修飾している場合との弁別不確定。心理的には *to* 付きの不定詞句が形容詞補語のように受け取られることもある。動詞によっては、*help*, *wish* など、この点に不安定なものもある。

62) ここでは、あくまでも不定詞構造が副詞要素であることを確立することを眼目とし、その名詞的用法を特に特殊であるとする。

63) 不定詞の文法的多義性をこの原則で処理する。例えば *I want to go.* と *I want him to go.* とを対比し、前者を再帰目的語の省略とし、不定詞句はいずれも副詞的とする。目的語 *him* が *the man* であった場合は不定詞句が後置形容詞とも取れるが、この原則により副詞句とする——*to come* を前者の目的語、後者の間接目的語とも取らない。勿論、後者を不完全他動詞構造として、不定詞句を名詞的あるいは形容詞的としない。

18.63 口語で、用法に拘わらず *to* のみで以下を代理し、切り捨てることがある。

### 深度—19

19.0 前文表現。

19.1 命令文。該当事項なし。(この項で予定の *have* による完了型に命令は不成立)

19.2 叙述文。*have* を一種の助動詞とし、各種動詞のいわゆる「過去分詞」——他動詞の場合は受動分詞と同形<sup>64)</sup>——と結合して1分節の動詞、いうならば「句動詞」[注1]を構成し、意層の事項として、いわゆる「完了」の諸相を担う文法形式、すなわち「完了型」を構成する[注2]<sup>65)</sup>。

[注1] 法助動詞と原形動詞との結合に類同。ただし、ここでの *have* は法助動詞と違い、彙層でも、意層でも意味を持たず、単なる記号である。*have* は動詞と同じ屈折、変化をするが、命令文は作れない。(上記19.1は不可能。)

[注2] 他動詞、自動詞の別なく「完了」を表現する一種の時制であるとされている。

19.21 完全自動詞構造。*have*+完全自動詞の完了分詞による完了型を導入。*have* の準動詞を含む各種屈折を範列により導入<sup>66)</sup>。指：*be* と完了分詞の組合せ(16.6)による表現との弁別。

19.22 完全他動詞構文。完全他動詞の過去分詞<sup>67)</sup>による「完了型」導入。法助動詞+原形 *have*+完全他動詞の過去分詞の型を導入。指：3個の単語の結合による述語動詞句は後出の20.22を除き、これ以外にない。

19.221 与格動詞構造。「完了型」を導入。上記と同様に法助動詞、ただしその過去形に *have*

64) *have* の後にだけ現れ、「能動、しかも完了」という相的意味を担うとされるこの屈折形は、分詞として形容詞的補語となり、あるいは名詞を修飾することもなく、また「分詞構文」を作ることもない。54)でも触れた。

65) 「完了」という意味から、*be*+完了分詞による完了型16.23との両立を認めているが、*have*+他動詞の「過去分詞」という構造は不合理。現実には前者に情況的、後者に経過的表現を分担させている。

66) 助動詞としての *have* に限り「過去分詞」の用語が有効——受動分詞でも完了分詞でもない。しかし、一種の分詞であるとするため。

67) 他動詞の「完了分詞」というべきところ。

(原形) を介して接続[注1]。指：文層での意味を上記との対比で説明。

[注1] いわゆる「仮定法過去」。

19.23 不完全自動詞構造。同様に完了型を導入。法助動詞との接続も循環的に導入。

19.24 不完全他動詞構造。同様に完了型を導入。*have* を現在分詞にすることで完了の相を担った分詞構文が可能——上記, 16.6の段階では不可能であった。ただし *have* の「受動でない過去分詞」による分詞構文は不可能<sup>68)</sup>。

19.3 疑問文。助動詞 *have* を前頭 (主語の前) に倒置する。代動詞 *do* を適用できない。

19.4 感嘆—強意表現。完了の標示ないし助動詞としての *have* は代動詞 *do* によって強意できない[注1]。

[注1] 助動詞の重複になる。

19.5 反転表現。完了型の反転は *not* などを *have* に後置することによる。指：代動詞 *do* によらない。

19.6 変形。*have* に、更に動詞 *get* の過去分詞 *gotten* もしくは *got* 以下を接続し完了型をなすことが慣用的にあるが、ここでいう完了型とせず、他動詞あるいは助動詞 *have* の強意形と考える。

## 深度—20

20.0 前文表現。

20.1 命令文。該当事項なし。(この項で予定の *have + to* 型に命令は不成立)

20.2 叙述文。*have* を助動詞として *to* 付きの不定詞構造と接続, 結合して一種の動詞句を構成する。*have* には文層, 彙層ともに意味がなく, 合体して意層の事項として義務, 当然, 期待などの意味を表現する。

---

68) 助動詞 *have* の「過去分詞」は完了分詞でも, 受動分詞でもないとするので。助動詞としての *have* の特異性は了解困難。



20.21 完全自動詞構造。*have + to* 付き完全自動詞不定詞句を適用。

20.22 完全他動詞構造。*have + to* 型の *have* の準動詞を含む各種屈折, 変化形を適用。*be* 動詞に現在分詞形を接続し進行型を, 原形を介して法助動詞に接続させることも可能[注1]。

「完了の *have*」との類同性——いずれにおいても本来の彙層, 文層における意味, 機能——例えば命令文を作るなど——を。

[注1] 上記19.22と同じ。ただし, *to* があるので事実上では4個の単語の接続が1個の述語動詞句ないし分節となる。

20.221 与格動詞構造。19.221と同様に, 過去形法助動詞に接続[注1]。

[注1] 「仮定法過去の義務」とでもいうべき表現となる。

20.22 完全他動詞構造。*have + to* 付き完全他動詞不定詞構造を適用。*have* を現在分詞形にすることで分詞構文とし, 文副詞ないしは話者の副詞にすることもできる。

20.3 疑問文。*have* の倒置によらず, 代動詞 *do* の先行による<sup>69)</sup>。

20.4 感嘆—強意表現。代動詞 *do* による強調可能。指: 法助動詞 *must*, 特にその過去形の代用とされ, 通常の意味, 当然, 予期などに加えて推量の意味も担うこともある。

20.5 反転表現。*have* を *not* で直接反転させず, 代動詞 *do* の *not* による反転とする。

20.6 変形。慣用的強調として *have* に *get* の過去分詞 *got* あるいは *gotten* が添加されることもある[注1]。

[注1] 上記19.6と類同している。

20.61 上記 *have* の過去形——厳密には仮定法過去形——が副詞 *better* を介して *to* 無し不定詞句に接続することを慣用的に認める。意層の事項として, 勧奨, 忠告, 優先などの意味を担う<sup>70)</sup>。指: 疑問, 強意, 反転などは代動詞 *do* によらず, 直接 *had* の倒置などによる。原形, 準動詞屈折を欠くので, 命令も, 法助動詞との結合も起こらない。

69) 助動詞 *have* が代動詞 *do* に接続する点が矛盾である。不完全他動詞ないし使役動詞としての *have* が, いわゆる「完了の助動詞」に転化した過程——目的語との位置の交替——と, この *have + to* 不定詞型の派生過程が類同している。

70) 現行の学校英語では必ず扱われる慣用の例である。現実の利用価値はともかく, 原理的には, 特殊, かつ末端的な事項である。

SYNTACTIC STRATUM —main routine—	Pre-sentential Expression		Sentential Expression					Transformation	
	Non-articulate expression	Single-unit expression	Imperative expression	Declarative expression —pattern—	Interrogative expression	Emphatic and exclamatory expr.	Negative expression		
Onomatopoeic utterances	Words	[ I ]	[ I ]	Intransitive -complete S+V	[ I ]	[ I ]	Inhibition	I, III, IV, II, V	Linked-sentences Deletion Insertion Enumeration, Repetition Apposition Substitution Quotation Inversion Extrapolation Transfer Idiom Solecism etc.
Ad hoc ejaculations	interjections nouns adjectives adverbs verbs(root)	[ III ]	[ III ]	Transitive -complete S+V+O	[ III ]	[ III ]	Negation	I, III, IV, II, V	
Non-verbal symbols	Phrases	[ IV ]	[ IV ]	Dative S+V+O+O	[ IV ]	[ IV ]	Negative question	I, III, IV, II, V	
etc.	noun phrases adj. phrases adv. phrases verb phrases	[ II ]	[ II ]	Intransitive -incomplete S+V+C <sub>n</sub> <sup>adj.</sup>	[ II ]	[ II ]	Ironic emphasis	I, III, IV, II, V	
	Clauses noun clauses adv. clauses	[ V ]	[ V ]	Transitive -incomplete S+V+O+C <sub>n</sub> <sup>adj.</sup>	[ V ]	[ V ]			
				Sentential Adverb					

GRAMMATICAL STRATUM —sub-routine—	within words			between words			Modification by sentential adverb
	Declension and inflection		Derivation	Auxiliary-verb phrase		Attribution	
Nouns and Pronouns by number person gender case	Verbs by number person tense	Verboids gerund participles persent part. (past part.) perfect part. passive part.	Noun to others Adjective to others Adverb to others Verb to others	modal + (to) root have + to + root have + past participle modal + have + to + root have + past part.	adjective to noun adverb to all but noun		
Adjectives and Adverbs by degree	Auxiliary verbs by tense mood	infinitive root	Agreement and Correspondence between Subject and Predicate determiner and number adj. or adv. and adv. clause		Bracketing by preposition subordinate conjunction	Verboidal subordinates in gerundial structure participial structure infinitival structure	

LEXICAL STRATUM	Part-of-speech classification							Mutations Derivation Transfer Borrowing Coining Quoting
	Closed group	auxiliary verbs incomplete verbs, II, V	pronouns	determiners	degree-less adverbs		prepositions	
Open group	dative verbs, IV verbs, I, III	nouns	numerals adjectives	adverbs	interjections			

SEMANTIC STRATUM	Meaning		Overtones contextual stylistic affective etc.
	at Expressional level	— within discourse	
Syntactic level	— sentence		
Grammatical level	— phrase		
Lexical level	— word		

Orthography, morphology, phonology, affixes, etymology, etc.

Socio-cultural, psycho-linguistic background, etc.